

海と田んぼからの復興プロジェクト  
第3回会議 議事録

【日時】2011年6月25日10時～12時、16時半～18時

【参加者】

中静(東北大)、河田(東北大)、占部(東北大)、岩淵(NPO法人田んぼ)、畠山(信)(NPO森は海の恋人)、川廷(CEPA JAPAN)、上田(Think the earth)、木村(東北大 GCOE)、牧野(東北大)、神山(千)(東北大)、菊池(東北大)、岩淵(翼)(東北大)、手塚(東北大)、村岡(東北大)、三浦(東北大)、神山(梓)(東北大)、阿部(東北大)、岩淵(裕)(サステナブル・ソリューションズ)、黒岩(アルキテクタ、NPOグリーンネックレス)、小倉(NPOグリーンネックレス)、三島(エジソン生命)、後藤(住友信託銀行)、藤田(日経BP)、綿田(カゴメ)、佐藤(健)(アースデイエブリデイ)、蓑原(国連大学)、佐藤(耕)(伊豆沼)、伊藤(伊豆沼)、河村(日本ヘルス工業)、藤島(イオンリテール、緑の地球ネットワーク)、佐々木(イオンリテール:復興支援商品部、緑の地球ネットワーク)、竹本(東北大 GCOE)、服部(サステナブル・ソリューションズ)、前山(NTTデータ経営研究所)(記)

【議論の振り返りと問題提起】

前回の議論内容と復興計画の現状(服部)

5/22に海と田んぼのグリーン復興を発表

国(復興構想会議)の復興計画、岩手や宮城の復興計画についての確認

貢献できるポイントとして、「生物多様性」から考える

COP10のAICHI TARGET

COP11で生物多様性版MRVを ※V: Valuing system (提案する、約束させる)

専門知識を活かして、測る、理解する、伝える、という部分を具体化

今後のスケジュールとして、東北大GCOEシンポジウムを2月に行う予定で、その場でグリーン復興についても言及する予定

【プロジェクト報告】

グリーン復興に向けたアクション: 生息生物モニタリング(占部)

予算獲得については、出来るところから進める

大規模攪乱の影響は生物が語っている

生息場所の確保は生態系の回復のシーズ

多様な生物の回帰が水田再生の手がかり

影響の大きさを把握し、要因を検出する

モニタリング結果などの情報を展開して、地域が生態系サービスを利用する道筋を作る

モニタリング地域

干潟: 23の干潟で干潟動物

水田: 南三陸から気仙沼に至る水田を25程度、水生生物

当初: 海浜植物や蝶類

今後10年をめどに、市民参加型で進めていく

市民参加型の調査を行っていた鈴木先生の事例があり、簡易なモニタリングであれば経験を問わずに実施できる(15分歩き回って見つけたベントスをポリ袋へ、穴を15個掘って出てきたベントスをポリ袋へ入れるという作業、同定も全員で行う)

6/5に東北大理学部生物学系の1~3年の有志で、福島県松川浦(鶉の尾)の調査を実施

観察地から推定値を算出すると、種数でいえば半数になっている

一方で震災前に見られなかった種も出現している

これからの作業としては、水田調査の選定・交渉、浦戸諸島や干潟での調査、モニタリング調査を主導する事務局の立ち上げ、NPO諸団体との調整・協力依頼 等がある

他のモニタリング活動との連携・情報交換: 岩手大、東邦大、東北大産研、東北大農学研究科等、

共有の仕組み、段取りをどうするかが大きな課題となる

ふゆみずたんぼ(岩淵)

フランスやスペインでは、冬季湛水を脱塩技術として活用しており、東北においても脱塩としての活用が可能である

(例: スペインのエプロデルタなど)

上層に淡水があれば、塩の上昇が抑えられる

田んぼの生き物調査を確立された方法で行う

ふゆみずたんぼ復興プロジェクトを行える田んぼを募集し、資金は東北サイコウ銀行にて販売を検討している「福幸米」

の一部を充てる

今後のスケジュールとしては9月までにがれき片付け、10月に湛水、来年の春に作付をする、現状、コメは復旧作業に参加したボランティアが購入することを想定

「海の指先を避け、山の指先に住む。」構想を掲げていたが、既に、京都大学が海の指先の高台にエコタウンを構想  
(50数世帯：舞根のほぼ全世帯)

伊豆沼・プロジェクト-アイ（営み住宅プロジェクト）

伊豆沼の昔の農村コミュニティの復活

小学生以下の交流活動や体験学習を行う

「あるものさがし」：新たな価値を見出して新しい産業を  
エネルギーの循環を重視する

いのちの広場：ニワトリやブタを自分たちで育てて食べる

地盤沈下の影響で水がたまらない田んぼもある

CEPA JAPANの活動（川廷）

生物多様性の概念（くらし・生活の基盤）を伝承していく

国連生物多様性の10年の中でほぼ毎年マイルストーンがある

マルチステークホルダーでの働きかけを重視している

RQ市民災害救援センターなどのボランティアセンターを人と自然と地域の学びと対話の場に

もともとは自然学校（全国に3700校ある）が発祥

災害対策拠点であるが、被災地に雇用や学びの場を提供、地域の自然や伝統文化を活かし、都会の人々との交流も生まれ、経済にも貢献する可能性がある

被災地に足をつけて活動を続けていきたいという人も出てきている

Japan VOICES：リオ+20へ提示する意見を検討

ホワイトフレーム（Open Mindow Project）：いのちのつながりを問いかける

今後に向けて

助成金の申請を各プロジェクトで検討していく

コミュニケーションの前提として、誰に伝えたいのか（都市の人／地元の人／子どもたち）を明確にする

宣言は復興会議や県に向けた発信だった

各プロジェクトの進捗

舞根：グリーンネックレスにアイデア支援をお願いしているところ、住友の助成金にエントリー予定（6/30まで）、三井の助成金も申請する予定（岩淵）

浦戸諸島：大々的にここをこうするべきだと言うべきではないので、今すぐ助成金などの申請を出すわけではない（河田）

塩害のふゆみずたんぼの復興について、三井の助成金に申請を出したがレスは来ていない（岩淵）

東北サイコウBank：東京の宮城アンテナショップにおける福幸米の販売は決定でお店からの注文待ち、サイトは立ち上げの準備中、助成金等の資金はない状況、東京サイドには売り出す際に露出のサポートをしてもらえたら良い（三嶋）

エコプロ展のCBD枠で福幸米（ふゆみずたんぼ）を紹介、長期予約の紹介も行うことを検討（佐藤）

本会議の位置づけに関する検討事項

会議自体の目的をどうするか

⇒基本的にはフォーラムとして開催、興味のある人が集まってプロジェクトを創出・拡大していく

開催頻度をどうするか

5/22の発表ではあまり取り上げられなかったが、復興宣言を今後どうしていくか

東北大学における寄付講座の立ち上げ

基金としてまとまった金額をもらえれば開設は可能

5年間で最低4千万、モニタリング結果をグローバルに展開できる、先方からの申し入れがないと作れない

「グリーン復興講座（案）」を作る

プロジェクトシートをまとめて、カリキュラムの構成要素を検討する

企業にとって、フィールドがあれば社員研修（ボランティア）の場となる

三井物産環境基金など、お金の投資だけでなく社員研修の場（アサザ基金のイメージ）

CSRというより、企業の事業にどう関連するかという観点で見る必要もあるが、企業の価値観は様々

「グリーン復興指標」：待ち時間（ターンアラウンドタイム）、お金の計算できない面を時間で測る

グリーン復興に入ったときに、企業にとってのメリット（進む先）が不明瞭、企業は個別で動いている中で投資をすることに対して何を提供するのか

企業で準備しているお金があるので寄付先として大学が受け皿になる可能性があるが、企業によることは確か（財団には

お金が余っていてどうしようか困っている)

企業が投資をする対象(水田の復興か、島への支援か)を明確化することが大事で、ターゲットとして考えている企業がいれば、対話をしながら絞っていく

寄付講座の形態として、個人からの寄付で募ることも一案、一つの基金を作って募る

次回

9/12(月) 11時~17時 を予定